

# 新型コロナウイルス感染症拡大期に助産学生のためのオンライン訪問実習に協力した子育て中の助産師の認識：質的記述的研究

村上 真理, 川崎 裕美, 藤本紗央里, 上野 陽子

広島大学大学院医系科学研究科

(2021年1月28日受付)

**要旨：**目的：本研究目的は、新型コロナウイルス感染症拡大期に、助産学生のためのオンライン訪問実習に協力した子育て中の助産師の体験を明らかにすることにより、助産師が母親の立場で実習に協力することによって生じた認識を明らかにし、学生実習に協力することのキャリアとしての有用性を検討することである。

協力者：子育て中の助産師3人の協力を得た。

方法：オンライン訪問は2020年6月に実施し、協力者の語りを、実習評価のために、彼らの許可を得て記録し二次利用した。記録から逐語録を作成し、質的記述的に分析し、類似性で分類し、カテゴリーを抽出した。本研究は、広島大学疫学研究倫理審査委員会の承認を得た。

結果：助産師3人の平均年齢は36.3歳、卒業後平均12.3年経過し、2人から4人の子どもを育て、末子乳児の平均月齢は6.7カ月だった。5つのカテゴリーが得られ、【助産学生を育成する先輩として教育へ貢献する】【助産学生の誠実さに対しし初心者ならではの謙虚さを想起する】【オンライン訪問の利点を学習する】【オンライン訪問の課題を示唆する】【子育て中の母親として努力が受容されたことを喜ぶ】だった。

結論：オンライン訪問実習は、子育て中の助産師が、学生の教育に貢献していることを認め、学生の態度から誠実さや謙虚さを得心し、助産実践を省察する自己研鑽の機会となった。彼らは、オンライン訪問の活用賛同し、利用上の利点や欠点を母親と助産師双方の立場から考えた。自身の子育てが受容・賞賛され一人の母親としてエンパワメントされることで、ケアの受け手としての充実感だけでなく、ケアリングを会得し、キャリア向上を具体的に考える機会となることが示唆された。

(日職災医誌, 69:180-184, 2021)

## —キーワード—

子育て中の助産師, 新型コロナウイルス感染症, オンライン訪問実習

## 1. 緒 言

助産師に求められる実践能力と基礎教育卒業時の到達目標の一つに、他職種と連携・協働し地域の子育て世代を包括的に支援する能力<sup>1)</sup>がある。しかし、我が国の出生数の減少に加え新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、直接対面して実習協力を得ることが難しい状況があった。31,347人(84.9%)と多くの助産師が病院や診療所に就業しており<sup>2)</sup>、これまで分娩を中心としたケアに携わっていたことから妊娠・出産・産後と切れめなく地域で子育てを支援する困難<sup>3)</sup>も否めず、助産学生と現任助産師の双方の包括的実践能力の向上が急務である。

助産師は、自身の妊娠・出産・育児そのものが成長や

キャリア発達に直結<sup>4)</sup>する。その経験を活かし働き続ける意義<sup>5)</sup>を感じやすい。一方、就業継続と子育ての両立は難しく<sup>6)</sup>、離職理由の一要因でもある。助産師がキャリア開発に前向きなほどバーンアウトしにくい<sup>7)</sup>ことを踏まえると、女性特有のライフステージの変化に合わせた、子育て中の助産師のためのキャリア支援が必要である。

新型コロナウイルス感染症拡大期に、地域子育て支援を包含した助産師学生のためのオンライン訪問実習を試み、子育て中の助産師に協力を求めた。彼らが、オンライン訪問実習に母親として対応したことは、ケアの受け手の視点と同時に、ケア提供者の視点の双方を体験することとなった。オンライン訪問実習は、未曾有の状況であっても、臨床実習及びキャリア支援として活用しうる

表1 オンライン訪問実習に協力した子育て中の助産師の認識

カテゴリー	サブカテゴリー
助産学生を育成する先輩として教育へ貢献する	相手の反応や力量に合わせて親近感のわく対話をする 経験や根拠に基づき専門的知識を誠実に伝える 子育てに関する情報を相手に押し付けけない
助産学生の誠実さに対峙し初心者ならではの謙虚さを想起する	学生時代こそ純粋に相手に向き合ってほしい 一所懸命なケアを受け相手を心からケアしようと思う
オンライン訪問の利点を学習する	電話と違い相手や子どもの表情や様子が伝わって良い 助産師や母親としての活動に活かせる パンフレットや動画が共有できて新しい 遠方でも身近に感じて嬉しい 家庭訪問と違い掃除のストレスが減り気楽
オンライン訪問の課題を示唆する	抱き方や体重計測や授乳支援などのケアは難しい オンライン接続の不具合時は動揺する
子育て中の母親として努力が受容されたことを喜ぶ	孤立しがちな子育て生活では傾聴されると癒しになる 母親としての頑張りを認め受け止めてくれて安心する 自分のためだけに調べて資料を作ってくれて嬉しい 自分だけでなく子どもへの心遣いが嬉しい

ことが実感された。

本研究目的は、助産師が母親の立場で実習に協力することによって生じた認識を明らかにし、学生のための実習協力によるキャリアとしての有用性を検討することである。

## 2. 用語の定義

助産師とは、厚生労働大臣の免許を受けて、助産又は妊婦、じょく婦若しくは新生児の保健指導を行うことを業とする女子<sup>8)</sup>をいう。助産師になるには、助産師国家試験及び看護師国家試験に合格し、厚生労働大臣の免許を受けなければならない<sup>9)</sup>。助産師は、医療法に規定される助産所を開業する権利が保障され、医師との連携のもと、正常妊娠・正常分娩を取り扱い、助産師の責任と判断で分娩を介助し、新生児のケアを行う<sup>9)</sup>。

キャリアとは、人の生涯にわたり仕事に関連した諸処の体験や活動を通して個人が自覚しうる態度や行動のつながり<sup>9)</sup>、とする。

## 3. 方法

### 1) 協力者

子育て中の助産師3人の協力を得た。

### 2) データ収集方法

オンライン訪問実習は2020年6月に実施した。データは、協力者の語りを、実習評価のために、彼らの許可を得て記録し二次資料として使用した。その語りの記録から、逐語録を作成した。

### 3) 分析方法

分析は質的記述的に行った。逐語録を繰り返し読み、協力者がオンライン訪問実習に参加して認識したと考えられる部分を抽出し、意味内容の類似性で分類し、サブカテゴリーからカテゴリーを生成した。分析過程における

真実性の確保は、解釈の偏りや矛盾がないか、助産学や地域看護学や質的研究を専門とする研究者らで繰り返し検討した。

### 4) 倫理的配慮

本研究は、広島大学疫学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した (E-2145号)。

オンライン訪問実習終了後に、協力者が語った記録を研究に二次利用することを説明し、依頼書を郵送し同意書で承諾を得た。依頼書には、研究目的、方法、協力への任意性と拒否権、期待される利益と不利益を記載した。協力者が語った記録は匿名化し、個人や地域が特定される内容は削除した。

## 4. 結果

### 1) 協力者の概要

3人の子育て中の助産師の平均年齢は36.3(最小32最大43)歳、卒業後平均12.3(最少9最大20)年経過し、2人から4人の子どもを育て、末子の平均月齢は6.7カ月だった。

### 2) オンライン訪問実習に協力した子育て中の助産師の認識

オンライン訪問実習に協力した子育て中の助産師の認識は、表1に示す5つのカテゴリーと16のサブカテゴリーが得られた(表1)。なお、文中の【 】はカテゴリーを、「 」は協力者の語りの一部を、( )は文脈を理解する上で必要な補足を示した。

【助産学生を育成する先輩として教育へ貢献する】には、次の語りが含まれた。「学生さんは教科書を情報(源)としてケアするけど、その人(相手)によって捉え方が違うし、(助産師の)言い方ひとつで伝わり方が違う。自分が本当に伝えたいことが(相手に)伝わるにはどうしたら良いか考えないといけない。(相手との対話の)

キャッチボールができる助産師になって欲しい。」「実際に（提案する離乳食の献立を）作ったら、どれだけ手間や時間が掛かるかっていうのは、自分もやってみたら？ そしたら『こう書いてありますけど、この方が楽でしたよ』と、提案する時に実際に（自分で）やったことも踏まえると良い。」「（わが子に）食物アレルギー（による症状）が出て、保健センターで相談した時『私は今わからないので、後から調べて送ります』って送ってくれた。（学生さんだったら）その場で答えんといかんって焦ると思うけど、私のために2回調べてくれるとか、すごい良かった。」「育児って答えが無い分、自分が思っている正解が（相手には）正解じゃない。無理に『これやってみて、すごい良いよ』って、相手に押付けないように気を付けている。』

【助産学生の誠実さに対峙し初心者ならではの謙虚さを想起する】には、次の語りが含まれた。「学生時代が一番純粋にお母さんと向き合える。私に向けてくれた愛情をそのまま色んなお母さん達にもしてもらえたらいい。」「学生さんの一所懸命さ、しっかり勉強していることが伝わった。」「優しくてまじめで誠実な学生さんで、もっと喋っていたい。私の事を思っただけでケアしてもらってこんなに嬉しいってことも分かって愛を感じた。そして、自分も相手を心から思っただけでケアしようって思えた。」

【オンライン訪問の利点を学習する】には、次の語りが含まれた。「電話訪問だったら（相手の様子が）分からないことが多い。向こうも気遣う。顔が見えて赤ちゃんの様子が見えたりすると、すごい安心する。」「例えば、赤ちゃんを見せながらとかできるなど、肌の状態とかもね、いくらぶくぶくで（身長や体重が）大きくなってても、心配な時とかあるから。『元気ですよ』とか（オンラインで診て）言ってもらえると、すごい良い。」「表情とか顔色とか、分かる。にこにこ答えてくれたりとか、真剣にぐっところれたりすると良い。」「今後の自分の助産師活動に、ママ会とか、母親学級とかもWEB（を活用して）いけるなって思った。すごい発見。」「新しいなあって、（オンラインの）画面共有とかでパンフレット見せてもらって。」「こんなに子どものポイント（興味）をおさえた動画を用意してくれるのが、うれしかった。上の子が2~3歳とかの人にはあれ（興味を引く動画）があるとだいぶ違う。WEB訪問する時は良い。」「遠く（県外からの訪問）なのに、私の（居住地の）周りの事（子育て情報）を言ってもらえて、すごく嬉しかった。遠方でも、（対象者に）近づく事は、いくらでも出来る。とても勉強になった。」「家に訪問してもらってより、（掃除の）ストレスが1個減る。本当に日常の家事で精一杯なので。WEB訪問だと、ここ（カメラに映る室内部分）だけ綺麗にすれば良いので気が楽。」

【オンライン訪問の課題を示唆する】には、次の語りが含まれた。「赤ちゃんの抱っことか、体重を測るとか、おっ

ぱいを吸うとか、リアルじゃないとアドバイス出来ない事って結構多いので。実質的にケアしてほしい人にとっては、もどかしいかもしれない。」「（赤ちゃんの抱っこ方法など）不器用な人が、カメラの反転を理解していないとか、向かいあっているのに左右を理解できないと、手取り足取り教えなきゃいけないので、人や場合による。」「（事前の）接続テストがうまく行かない時はドキドキした。」

【子育て中の母親として努力が受容されたことを喜ぶ】には、次の語りが含まれた。「（自分の話を）聞いてもらえるって言うのは、産後のお母さんにとってすごい重要な事。『今・・・で悩んでるの・・・』と聞いてもらえて、『それで良いですよ』ってにこにこ受け止めてもらえるだけで、安心する。自分の生活って、赤ちゃんと2人きりで、大人と会話する事が無くって、1日があつというまに終わっちゃったって事もある。聞いてもらえるって、産後の癒しになる。」「（自分が）全然否定されないと言うか、認めて受け止めてくれる感じだったので、すごい嬉しい。安心できる環境だった。『それでいいよ』って認めてもらえる言葉がけが結構多かった。お母さんとしては、絶対この人だったら色々話して大丈夫かなって思える（オンライン訪問の）環境作りがすごい。」「パンフレットを丁寧に、自分のためだけに、考えて作ってもらえるのは、本当に素直に嬉しい。できることをやってみようって思っただけで、すごい嬉しかった。お母さんとして心強い資料だと思う。」「（画面背景をわが子の好きなアニメに設定する）心遣いが、それだけで嬉しい。」

## 5. 考 察

協力者の年齢・卒後年数・子ども数と助産師のキャリアパス<sup>9)</sup>を照合すると、生活と仕事と学習の調和がとれる時期<sup>9)</sup>に相当する。彼らは、助産師として求められる期待や果たすべき役割を再考する時期に、オンライン訪問実習に参加したと考えられる。正にこの経験は、仕事に関連した体験や活動を通して個人が自覚しうる態度や行動のつながり<sup>9)</sup>であり、キャリア開発そのものと考えられる。

オンライン訪問実習は協力者にとって、【助産学生を育成する先輩として教育へ貢献する】機会となった。彼らは、相手に合わせたコミュニケーション、子育ての多様性を尊重したケア、根拠に基づく専門的知識の提供について、自らの助産実践例を交えその重要性を学生に伝えた。これは、助産師を目指す学生への正式な教育に貢献<sup>10)</sup>し、自身の出産・育児経験を学生の教育に寄与する機会<sup>11)</sup>を、具現化したと考えられる。学生のためのオンライン訪問実習を子育て中の助産師のキャリア支援として活用する場合、「教育的配慮ができる」という目標を設定し、下位目標として、「自らの助産実践例を交えその重要性を学生に伝える」と設定することが可能と考えられる。



協力者が後輩育成に貢献したことは、【助産学生の誠実さに対峙し初心者ならではの謙虚さを想起する】相互作用をもたらし、相手の立場から助産実践を省察する自己研鑽となった。これは、実習協力した育児中の看護職者が学生の一所懸命さから初心を思い出し自身のケアを再考する<sup>11)</sup>と合致しており、相手の成長を援助することで提供者も自己実現するというケアリングの相互関係<sup>12)</sup>を子育て中の助産師が会得したと推察される。オンライン訪問実習を彼らのキャリア支援として活用する場合、「初心を想起し自身のケアを再考する」という目標設定が可能と考えられる。

協力者は、【オンライン訪問の利点を学習する】と同時に、【オンライン訪問の課題を示唆する】ことで、今後の助産実践への活用を想定した。これは、自己の成長や知的・専門的成長を積極的に目指し助産業務に反映<sup>10)</sup>させ、自身の経験に基づき形成される実践知を体現化<sup>13)</sup>したと推察される。オンライン訪問実習を子育て中の助産師のキャリア支援として活用する場合、「利点欠点を示唆し助産実践に活かす」という目標設定が可能と考えられる。

乳幼児ケアの専門家であっても、新型コロナウイルス感染症拡大防止による活動自粛は、心身のストレスが蓄積されるが、協力者が【子育て中の母親としての努力が受容されたことを喜ぶ】ように、肯定され一人の母親としてエンパワメントされた。この経験は、ケアの受け手としての充実感はもちろん、子育てに専念し孤立しがちな母親を受容・傾聴する等の体験に裏付けられた助産ケアに繋がり、後輩指導への還元が期待される。助産師の子育て経験は、それを強みに助産実践能力に発揮されキャリア発達に繋がる<sup>14)</sup>が、オンライン訪問実習も同様に、ケアする人の生き方や生き様が相手に映し出されるケアリング<sup>13)</sup>を高め、地域における子育てを支援するために必要な助産師の実践能力を育む機会となることが示唆された。

今回のオンライン訪問実習は、新型コロナウイルス感染症拡大期での急な試みであり、協力者は3人、訪問は1回限りと限定的な結果となった。今後の課題は、多くの子育て中の助産師に協力を得て、協力者の行動目標を具体的にし、意図的な介入と学生指導の場の設定、指導力向上のためのフィードバック、継続的に複数回学生が訪問するなど、助産師の継続的な卒後のキャリア支援の実習教材として、検討を重ねることである。

## 6. 結 論

オンライン訪問実習は、子育て中の助産師が自身のキャリア向上を具体的に考える機会となることが示唆された。その根拠として、【助産学生を育成する先輩として教育へ貢献する】【助産学生の誠実さに対峙し初心者ならではの謙虚さを想起する】【オンライン訪問の利点を学習

する】【オンライン訪問の課題を示唆する】【子育て中の母親として努力が受容されたことを喜ぶ】の5つのカテゴリが抽出された。

謝辞：本研究にご協力をいただいた子育て中の助産師の皆様、学生の皆様に感謝いたします。

〔COI 開示〕本論文に関して開示すべき COI 状態はない

## 文 献

- 1) 厚生労働省：看護基礎教育検討会報告書。2019-10-15. <https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf>, (参照 2020-6-9).
- 2) 厚生労働省：厚生統計要覧(令和元年度)第2編保健衛生第2章医療第2-50表。 [https://www.mhlw.go.jp/toukei/youuran/indexyk\\_2\\_2.html](https://www.mhlw.go.jp/toukei/youuran/indexyk_2_2.html), (参照 2020-1-18).
- 3) 槻木直子, 岩國亜紀子, 川下菜穂子, 他：子育て世代包括支援センターで活動する看護職が提供している妊娠期からの切れ目ない子育て支援。兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要 26：41—59, 2019.
- 4) 北川良子：出産・育児期にある助産師の仕事意欲に影響を及ぼす要因。母性衛生 51 (4)：684—693, 2011.
- 5) 阿部 慈, 佐々木睦子：中堅助産師のキャリア発達への思いのプロセス。香川大学看護学雑誌 21 (1)：1—12, 2017.
- 6) 水井美生, 上田邦枝：助産師の考える復職支援とキャリア形成—育児休業取得後の助産師のインタビューから—。母性衛生 60 (3)：204, 2019.
- 7) 遠藤ちなみ, 山田彩世, 野上いづみ, 他：産科病棟で働く助産師の責任の重さとバーンアウトとの関連。日看護会誌 23 (1)：92—102, 2019.
- 8) 保健師助産師看護師法：昭和23年7月30日公布。 [http://www.mhlw.go.jp/web/t\\_doc?dataId=80078000&dataType=0&pageNo=1](http://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=80078000&dataType=0&pageNo=1), (参照 2020-6-9).
- 9) 公益社団法人日本看護協会：助産実践能力習熟段階活用ガイド。2020-3-31. [https://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/guideline/CLoCMiP\\_katsuyo.pdf](https://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/guideline/CLoCMiP_katsuyo.pdf), (参照 2021-1-18).
- 10) 国際助産師連盟：助産師の倫理綱領。 [https://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/rinri/icm\\_ethics.pdf](https://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/rinri/icm_ethics.pdf), (参照 2021-1-7).
- 11) 村上真理, 福島紗世, 小澤未緒, 他：看護基礎教育における新生児/乳児家庭訪問演習に模擬患者を活用することで学生が獲得する能力。日本母性看護学会誌 17 (1)：105—111, 2017.
- 12) 筒井真優美：ケアリングの概説。KEIO SFC JOURNAL 18 (2)：136—155, 2018.
- 13) 西田絵美：看護における〈ケアリング〉の基底原理への視座：〈ケアリングとは何か〉。日本看護倫理学会誌 10 (1)：8—15, 2018.
- 14) 岡津愛子, 松村恵子：助産師の出産体験による働くことへの意識変化。香川母性衛生学会誌 12 (1)：47—51, 2012.

別刷請求先 〒734-8553 広島市南区霞1—2—3  
広島大学大学院医系科学研究科  
村上 真理

**Reprint request:**

Mari Murakami

Graduate School of Biomedical and Health Sciences, Hiroshima University, 1-2-3, Kasumi, Minami-ku, Hiroshima, 734-8553, Japan

**The Recognition of Online Visit Practice by Midwifery Students on Child-rearing Midwives during the COVID-19 Pandemic: A Qualitative Descriptive Study**

Mari Murakami, Hiromi Kawasaki, Saori Fujimoto and Yoko Ueno  
Graduate School of Biomedical and Health Sciences, Hiroshima University

**Purpose:** We attempted to verify the usefulness of midwives experiencing training as mothers by clarifying the recognition on those midwives who are raising children and who have experienced online visit training by students.

**Methods:** The online visitations were conducted in June 2020. The collaborators were three midwives who were devoted to childcare. During the online visit training, we used the feedback records of their questions given by the collaborators to the students. The verbatim record was created from the records. Qualitative descriptive analysis was used, and categories were extracted. This study was approved by the Ethical Committee for Epidemiology of Hiroshima University.

**Results:** The average age of the three midwives was 36.3 years, with an average of 12.3 years of experience after graduation. They were each raising multiple children. Their youngest infants were 6.7 months old on average for all. Five categories that emerged were: contributing to the development of midwifery students as a senior; recalling the humility of beginners through the integrity of midwifery students; learning opportunities about the benefits of online visits; suggesting further challenges for online visits; and the joy of accepting the efforts of a mother while raising children.

**Conclusion:** The online visit training was an opportunity for midwives who are raising their own children to reinforce an honest and humble approach based on the attitude of the students, for self-improvement, and to reflect on the practice of midwifery from another person's viewpoint. It was also noted that the midwives contributed to the midwifery education. Furthermore, they also agreed with the use of online visitations and considered the advantages and disadvantages of its use from the perspective of mothers and midwives. Online visits were seen to empower midwives on childcare leave, as their child-rearing was accepted and admired. Online visits by students were considered to be an opportunity to not only provide a sense of fulfilment as a recipient of care, but to also concretely think about career advancement during childcare leave, regarding the ideal way for midwifery training and teaching.

(JJOMT, 69: 180—184, 2021)

**—Key words—**

child-rearing midwife, COVID-19 pandemic, online visit practice